

# 上海のドイツ・ユダヤ人 (1)

— 序 説 —

山 下 肇

## 1. はじめに

schanghaien という動詞がある。ヴァーリッヒ (G. Wahrig) によれば、*Matrosen gewaltsam heuern [nach der chines. Stadt Schanghai]* と説明されている。「独和」の辞書でも、海事用語として「(誘拐などして) むりやり船員に雇い入れる」とか、俗語として「だましてむりやり船員にする」など、「英和」の shanghai (動) の項では、「麻薬をかけて (酔いつぶして) 苦力を船へ連れこんで水夫にする」「誘拐する」など一層あくどいことになっている。この一語をもってしても、上海という国際的な港町の歴史的な都市像が息をのむほどに奥の深いことが容易に想像できるであろう。

アヘン戦争を機として「南京条約」(1842年)によって生れた国際都市上海は、いわば「祖国のなかの異国」としてきわめて複雑特異な発展の歴史を重ねながら、外国人船乗りたちの間にこのような意味内容のニュアンスを含んだ言葉を流通させて、上海のイメージに数奇な色調を附着させてきた。しかも、第二次世界大戦中には、上海は世界の無国籍亡命者たちがヴィザなしで自由に入出できる、国際的にほとんど唯一のひらかれた世界都市であった。むろん上海には、革命や新文化モダニズムの発祥地、2度にわたる「上海事変」の戦場、魯迅の抗日の舞台等々、その他無数の顔があ

る。横光利一の『上海』(1931年)から林京子の『上海』(1983年)にいたるまでほぼ50年の日本人の上海体験の無数の軌跡を考えただけでも、上海の意味するものは思い半ばにすぎることがあろう。

いま私がここで辿ろうとする軌跡は、その中のドイツ・東欧系ユダヤ人たちのそれにすぎないが、私自身も1965年の正月をここ上海で阿部知二を団長とする訪中団の一員として迎えた思い出をもち、共に旧知である武田泰淳と堀田善衛が「現代の混沌について」対談している中味の上海から、私は限らない触発を受けている。この2人は日本の敗戦を「此の濁った底知れぬ虚無の街」(横光)上海で体験したのである。その対談の一端、どちらの発言ということもなく(終始武田の方が主導である)、かいつまんで紹介し、私の問題意識のライトモチーフの所在をまず——少々長くなるが——示しておくことにしたい<sup>1</sup>。

「現代小説、現代の混沌を書くという考えの前提ないし底には、現代史を小説の形で書こうという考えが、積極的な、現実に対する対抗概念として、意識・無意識にかかわらず、作家全部にあると思う。……いま世界の文学には“同時性”(又は“共時性”)が採りこまれている。さまざまな人物が勝手な行動をやっている。アンナ・ゼーガースの『第七の十字架』(1942年)や『死者はいつまでも若い』<sup>2</sup>(1949年)でも、さまざまな家庭が遠慮会釈もなく同じ条件の下で違った道筋をとる状況が個別勝手に取上げられている。……現代の混沌をいう場合には、混沌と混乱とはハッキリ違うのだ。混沌には、作家の理知を誘い出し、作家を試し、作家に精神的処理を要求する、創造の根源となるものがある。……日本では“万世一系”とかいって、時間というものを、もののあわれの的に、一つの筋において見る考えしかなくて、それが日本の文学に絶大に影響している。しかし歴史は常にたくさんの断絶が集まって、混沌のように見えながら実はエネルギー不滅の原理のように空間的にまとまって持続していく。そういう空間的な歴史観が日本になかったことが、日本の文学を決定づけてきた。これで

は“同時性”の考えは起きえない。並列しつつ滅亡したり征服したりされたり、それが宇宙的空間を成しているという歴史観がなければ、いまの小説は理解できない。……ぼくも実際上海でもって今度の敗戦を迎えなければ、おそらく小説を書こうとしても、書く意味をくつつけることが、日本の小説に対してできなかつたろう。上海に行って初めて植民地というものがわかった。東京や大阪だってやはり一種の植民地だということがね。まず第一に、バンド（黄浦江岸の<sup>ワイクン</sup>外灘）の所にずらっとビルが建っていて、それがみんな外国のビルじゃないか。つまり、日本で敗戦を迎えた人と、外国人の真只中で敗戦を迎えた人とは違うんだ。大げさにいえば、世界の審判だよ。各民族が、自分一個人に、単に日本人としてだけでなく、一人の生活者として、批判の目を集中してきている状態に立ち至って、その批判は相当に決定的でもはや救いの途はないような状態とすれば、どんなバカでもチョンでも、考えざるをえないわけだ。無数の民族がいるなかで、インド人もロシア人もフランス人もイギリス人もいて、彼らはみなこの世界の何かであるのに、日本人だけは<sup>変なやつ</sup>なんだからな。（これはヒトラー・ナチス治下のドイツ人も同じ「変なやつ」であつたらう。筆者）

そのときわれわれが感じたのは、明治以来の日本の文化人の運命をになつているという感じだった。日本の文化というものは、むりやり東洋最大の資本主義国にのし上ろうとしている意味の文化と、何か東洋諸民族に対するヒューマニティ・友愛の精神というもの、この二つの全く矛盾したものを同時にはらみつつ進んできた。それがいかに深い矛盾で、バカバカしい不可能事であつたことか。それはもちろん漱石も鷗外も荷風も潤一郎も、全部感じていたことだ。それが我々上海にいて敗戦にあえば、いかに鈍感低能でも、やっぱりそうだったかと思わずにはいられなかつたよ。あのとき、一緒にいた石上玄一郎は、おれたちばかりが滅亡するんじゃない。人類なるものは、滅亡する運命を今まで何回も蒙ってきた、破滅的大大的な滅亡を何回となく、と主張していた。外地にいればこそ、日本人の

持っている多くの要素が世界の審判に強烈に叩かれて、そこでグッと根性のありっただけが出たようにも思う。外地の先機関は、国内には素人にはわからぬ全体的なからくりを、ミニチュア版のようにたやすく見せてくれる。大使館も銀行も軍部も、偉そうに構えていても実はたいした代物じゃなくて、我々と似通った弱点欠点をハッキリさらけ出して、我々の人間論を相当にしっかりさせてくれたさ。その上で痛切に感じたのは、敗戦の詔書のことだ。日本イデオロギーのために、他民族に無数の犠牲者が出ているというのに、それに対して全然知らん顔なんだな。“遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス”だなんて、それ以外一言も触れていない。あれには驚いたな。根性が知れるよ。国内感覚だ。あんなことで済むと思ってるんだ、ひどいもんだ。それで何とか済んじまうんだから、実に奇妙な現象だ。いくら懺悔すると言ったって、証拠が残らんよ……(笑)』

そして、「詩人と思想家の国」と曾て讃えられたドイツは、カール・クラウスの言う「裁判官と刑吏の国」になりさがっていき、ヘルマン・ヘッセはゲーテ賞を受けた直後の謝辞のなかで「第一次世界大戦以来、この謎めいた、偉大な、気まぐれなドイツ国民と私との関係は、どんなにとげとげしい、不快な、どんなに双方を傷つける、面倒なものであったことか」(1932年)と叫ばずにはいられなかった<sup>3</sup>。そして、滅亡と滅亡、民族と民族のはざまの混沌をほとんど神秘的といってもよい生命力で生きぬき、ディアスポラのただなかで精神と文化の力をたえず裏街道から世界にむかって告知し、パイオニア的な知恵を創造して道なき道を拓いてきたユダヤ人の歴史は、日本人とまさに対照的な意味で、人類的な普遍性につながるものをここアジアの一角の上海においても、また典型的に示しているのではないか。第二次大戦中、世界各国から追われて行き場を失ったユダヤ人たちは、吹きだまりのようにここ上海に集結したのだった。例えば、デープリン『ベルリン、アレクサンダー広場』(1929年)の舞台は上海におきかえられても少しもおかしくはないし、事実デープリンやブレヒトの作品に

は中国から材をとったものが少なくない。ヴィッキー・パウムの世界的ベストセラーとなって映画化（グレタ・ガルボ主演）された『グランドホテル』（Menschen im Hotel）（1929年）などにも同じことがいえよう。横光利一の『上海』は、1925年の「5・30事件」当時の国際的植民地都市にひしめきあうさまざまな現象や人物の動きに目をむけているが、同じ年の広東革命に作者自ら参加して書かれたフランスのアンドレ・マルローの作品『征服者』（1928年）、次で27年上海の革命弾圧（蒋介石）を背景とする彼の『人間の条件』（1933年）のこともよく知られている。

1933年ヒトラーの政権掌握以降、ドイツのユダヤ人たちの亡命は一斉に相次ぎ、渡航のためのヴィザやトランジット（通過許可証）の取得は困難をきわめ、Identitätskarte（身分証明書）のもつ深刻な意味がユダヤ人の運命に激しく襲いかかったことは周知であろう。こんにちのいわば流行語である「アイデンティティ」のそもそもの発端はここにあり、この深刻な烙印を背負って辛うじてアメリカに辿りつきえたユダヤ人の意識の中からあのエリクソンの心理学的照射（『幼年期と社会』1950年）が生れた。A.ゼーガースの『トランジット』（1943年）はナチに追われてマルセーユ港市に逃げこみ、必死でトランジット（通過許可証）を求めるユダヤ逃亡者たちの悪夢のような世界を描きだす。よしんばその結果乗船は可能になっても、行先の国での上陸不許可の障壁が待ち構えている。1939年5月、ハンブルク港を、ユダヤ最後の亡命客937名を乗せて出港したセントルイス号は、アメリカや南米諸国からもすべて上陸を拒否され、やむなく再び死が待つだけのドイツへと針路をとったが、辛くも英国沖で救出許可を得た。この船の航海中のドラマも「グランドホテル」に似て、戦後アメリカで映画化され、『さすらいの航海』として我々も観ることができた<sup>4</sup>。このようにいわば「全世界から見すてられた」人々の、唯一の上陸滞在自由とされた都市こそ上海であって、事実、戦時下を上海に過したドイツ系ユダヤ人の中から、後のカーター政権時の財務長官となったマイケル・ブルー

メンソール (Michel Blumenthal, 当時 50 歳) のような人物が出た。彼もハンブルク生れで 13 歳でナチに追われ、シベリア鉄道経由で中国に入り、上海のユダヤ人地区で食いつなぐために各国語を覚え、戦後その言語力を買われて米第 7 艦隊に雇われ、1947 年僅か 60 ドルを懐中にしてサンフランシスコに上陸したといわれている<sup>5</sup>。その後の経歴はキッシンジャー等と似たもので、日本語も中国語も喋り、宮沢蔵相らとも知己で、たびたび来日している逸材である。

最近の「日中文化交流」紙によれば<sup>6</sup>、既に 1 年前から上海音楽学院の客員教授として活動しているエレクトーン演奏家の日野正雄の通信は、氏の現在生活する学院の建物が曾てのユダヤ人コミュニティーのものだったことを伝えている。しかも日野氏はそれまで毎年のように勉強や演奏会でエルサレムを訪れ、ヘブライ音楽に親しんできた人だという。最近しきりに今更のように「国際化」の唱えられている日本だが、日本人の進んだ部分と国内のおくれた部分とでは、おそろしいほどの意識のギャップが広がりつつあるのが実情ではないだろうか。

## 2. 中国とユダヤ人 ——そして上海素描——

紀元後 70 年、パレスチナを逐われたユダヤ人「<sup>ディアスポラ</sup>離散の民」の落ちゆくさきは、必ずしも東西欧や北アフリカ地中海岸に留まらず、東方イスラムの世界やインド地域からさらにシルクロードを越えて中国にまで及んだ。当時シルクロードの終点は、黄河畔の要路に位置して繁栄する開封府であった。ここにユダヤ人集落が定着して立派なシナゴグを建てたのは、およそ 1163 年 (南宋隆興元年) といわれている。その他北京、杭州、泉州等の都市にも 8 世紀頃から相当数のユダヤ人がシルクロードまたはインドからの海路で中国に渡来し居住していたことが欧州からの数々の旅行者見聞記録類によって明らかだが、何と云っても開封はその中心としてユダヤ教関

系の貴重な經典祭具類も携行されて豊かなユダヤ人生活が営まれていたという。黄河は度々の氾濫で開封に多くの被害を及ぼし、そのためにシナゴークも度々再建されて17世紀中葉まで維持されたが、たび重なる氾濫・戦乱・饑饉などで同地のユダヤ人も貧窮化し、次第に中国民族の中に同化・混血・吸収されて、今わずかにその血をひく子孫が残存するとしても、既に全く中国化して過去の遺産を留めてはいない。最盛時の開封は160もの商業組合があり、娯楽遊芸も盛んで、一時は国都となるほど商業の殷振をきわめた大都市だったから、ユダヤ人にとっても恰好の定着地であったろう。この開封のユダヤ人史については、杉田六一著『東アジアへ来たユダヤ人』（1967年、音羽書房）にかなり詳しく紹介されている。

その後18、9世紀には英米仏独墮香港等の研究者による学術調査が開封を対象として度々試みられたが、すでに潰滅後で大きな成果は得られず、しかしマルコ・ポーロの『東方見聞録』（13世紀末）などから伝えられ、1602年にも伊のイエズス会士マテオ・リッチ（Matteo Ricci, 1552—1610）が開封のユダヤ人の実在を報告していることから、折からの17、8世紀欧州の中国趣味流行の波にもあおられて、開封にはいわゆる「失われたイスラエル十族」の一つがいたのではないかという関心も高まっていたので、欧州人の開封への注目はしばしば幻滅を味わいながらも今日まで続いている。この点では最近にも若干の報告が近況を伝えていて、関心の動きは依然衰えていないことを示している。例えば、“TIME”誌の1985年2月号に「中国のユダヤ人にとっての新しい希望」というレポートで開封在のユダヤ人子孫がシナゴーク跡に石碑を建てる計画中と報じられ、それを確認しに開封まで行った日本人があるという<sup>7</sup>。たしかにシナゴーク跡は今も「教経胡同」（聖書を教える通り）という地名でよばれていたそうだが、当の子孫なる人物は1980年代に入って毎月のようにアメリカから来るユダヤ人団体の対応に疲れはて「自分はもう中国人なのだから放っておいてくれ」と面会を拒否しているとのことだった。

次いで1986年2月の「フランクフルター・アルゲマイネ」紙には「開封のシナゴーク。中国のユダヤ人史研究はまだこれから」という記事（署名者ゲルホルト・ベッカー）が載った<sup>8</sup>。ここでは9世紀以降シルクロードを経てユダヤ人が移住を開始して以来の開封中心の略史が記され、中国への最後の大移住が19世紀半ばのアヘン戦争以降に属し、当初はセファルディム（西欧）系が主で、後には独逸ポーランド地域から脱出したユダヤ人の移住が18,000名以上に達し、彼らは毛沢東の中華人民共和国の成立によってこの国を去り、香港や北米に移るまで中国を隠れ場としたわけで、この1000年余にわたる包括的な全体の歴史は、まだ十分に研究されていない、と指摘している。そして1984年の中国英国共同声明によって香港の返還が確認されて以来、閉ざされていた研究への門が再び活発に開かれようとしてつあり、翌85年には“Jewish Historical Society of Hong Kong”の編集する“Sino-Judaic Studies”第1巻が創刊され、第二次大戦後初めてのその種の試みとして、中国人学者の27論文のビブリオグラフィーが紹介され、その中の10論文は80年代に発表されたものという。多くは開封のユダヤ人を対象としているが、その他の地域に関しても現存する碑銘その他の文献資料のカタログ化が進められており、従来のもたまった研究としてはD. D. Leslie：“The Survival of the Chinese Jews” 1972, S. Jackson：“The Sassoons” 1968等に留まっていた学問的發展が、上記D. D. Leslieの85年北米に設立した“Sino-Judaic Institute”の活動開始とも併せ、今後は、急速に強められつつある香港ユダヤ学者との対話の下で、新たな展開が期待される、と報じているのである。前掲の杉田氏の著書以来すでに20年を経過した現在、この研究対象の学的動向は再び新しい局面を迎えているようである。

ところで、アシュケナジム（ドイツ東欧）系ユダヤ人が中国に目立って多くなるのは、19世紀末ロシアからの満州（東北）移住ユダヤ人の群である。帝政ロシアのポグロムの続発に併せて、シベリアから満州地域にわた

る鉄道建設、経済開発にユダヤ人を利用する政策のためであったろう。第一次大戦の戦争・徴兵忌避による来住も増加し、ロシア革命は一挙にして亡命者の大量来満をひきおこした。その居住地は主としてハルビンと奉天で、1922年には11,000以上のユダヤ人が満州におり、経済的基盤を築いて設けられた取引所の理事が13名中8名をユダヤ系で占め、理事長もユダヤ人という時代もあった。ソ連は23年にハルビンに極東銀行をおき、その首脳はすべてユダヤ系、駐満領事もユダヤ人、その他の重要企業もほとんどユダヤ系の掌中にあり、ハルビンのユダヤ系企業は112を数えたという。シナゴグももちろん存在したし、ユダヤ新聞も発行された。1931年の満州事変、続く満州国日本人の進出で、ユダヤ人勢力は急激に衰退し、彼らの大部分は上海その他の各地に移住し、第二次大戦後は残りのすべてがイスラエルとアメリカへ去った。

全中国のうち東北がロシアの進出地域とすれば、南西部は英仏独米の進出圏であり、何れにしてもその尖兵の役をユダヤ人が担っていた。アヘン戦争後、香港割譲、南方五港の開港、治外法権の設定はすべて西欧資本主義の中国進出を意味し、その中心拠点が上海となる。ここでようやく舞台は上海に移るのだが、その上海の南京条約後の第一段階に、まずボンベイと香港の多数ユダヤ人が上海に渡り、1867（慶応3）年にはインドで巨富を築いたユダヤ財閥サッスーン商会（Elias David Sassoon）が支店を上海に開設して、アヘン取引を一手に行使する。続いてバグダッドのハドリー（Kadoories）も支店を開き、ユダヤ人口の増加によりまずセファルディム系のシナゴグが建てられ、やがて日露戦争後には満州をへてロシア・ユダヤ人が上海に多数来て、アシュケナジム系もシナゴグをもつに至る。1928年には両者間に協定が結ばれ、統一行動もとられるようになる。1927年に落成したユダヤ教会堂 ベト・アーロン（Beth Aharon）はビザンティン風の建物で、上海市の最も風変りな建造物でもあったようだ<sup>9</sup>。

ここで上記のサッスーン家について略記すれば、同家はいわゆる「イス

ラム・スペイン」時代のスペインから、「レコンキスタ」時にギリシアのサロニカへ逃れ、次いで16世紀にイラクのバグダッドに定着、同地に生れた David が1831年インド・ボンベイに David Sassoon 商会を設立、「英国東インド会社」からアヘンの専売権を与えられて、これが英国の東洋進出の大きな軸となった。年に3万4千箱にも達したアヘン輸出に清国が強く抵抗して「アヘン戦争」となり、敗北した清国は香港割譲と共に上海・広東・福州・廈門・寧波<sup>アモイ ニーボー</sup>の5港開港を課せられ、これが西欧列国の中国侵略の第一歩となったのである。サッスーン財閥はこの「功」により英王室から「卿」<sup>サー</sup>の称号を得、上海支店を継いだ次男エーリアス (Elias) が「カンパニー」を創立(長男アルバートは英本國に住み、ロスチャイルド家とも閥閥関係にあった)、1880(明治13)年アヘン貿易はピークに達し、その没後は末弟デーヴィド (David E. Sassoon) が中国操縦の指揮をとり、その拠点がまさに上海であった。今日ホテル「和平飯店」となっている重厚な煉瓦造りの高層ビルは、かつて1929年サッスーンの建てた「キャセイホテル」を前身としている。第一次大戦で一時中国から後退した欧州列強は20年代に再び進出を積極化したのであろう。上海中央の繁華街に並ぶ大型ビルに刻まれたりプレートをはめたりしている年代の数字がそれを物語る。

上海といえば忘れることのできない「租界」は英米仏の租界がそれぞれ1840年代に出来、英米は63年に合併して「共同租界」となり、第二次大戦終結時まで約100年続いた。日本は明治初年に領事館・本願寺・三井物産・三菱商事が進出、横浜正金(東京)銀行が他の中国各地にさきがけて上海支店を明治26(1893)年に開き、日本の上海居留民団の設立は明治40(1907)年で、1935(昭和10)年の統計では、中国在留日本人のほぼ3分の1(約2万6千)が上海市に集中(当時の「満州」地区を除く)しており、日本は専管租界を作らず、共同租界とフランス租界のなかに割りこんだ形になっていた。その日本人の集中居住区は共同租界のなかの中心部に近い北四川路付近から虹口地区<sup>カンキュー</sup>にかけてであった。当時の上海に住む外国人は5

万をこえ、国籍は50カ国に及び、中国人は百数十万もこの租界に住み、人種と民族のるつぼと化していた<sup>10</sup>。

内山完造の自伝『花甲録』<sup>11</sup>によれば、内山氏が上海に第一歩を印したのは1913（大正2）年、28歳のことで、それ以後の上海の有為転変が活写されており、ドイツ関係についてもかなりの言及がある。内山書店の開業は1917（大正6）年で、上海の盛衰と歩みを共にしているが、第一次世界大戦後の日本が大成金となり、「物凄い勢いで上海に向かって発展してきて、日本人商社の数は瞬く間に3倍くらいになった」頃から、上海の日本人口は急増し、逆に排日運動も激化して、1919（大正8）年には全上海市の排日ゼネストまで発展し、激動の時代が続いていく。

林京子の短篇『老太婆の路地』<sup>12</sup>では、昭和13（1938）年に上海に住む作者一家が描かれているが、作者の郷里は長崎で、第一次上海事変（昭和7、1932年）で一たん上海から長崎に引揚げ、第二次の事変（昭和12年）で再び長崎に待避した一家が戦禍なまなましい上海に戻った後の生活体験がじかに伝わってくる。老太婆は赤煉瓦造りの借家の家主、その孫息子は抗日派の学生、家の差配は意地悪のイギリス人、日本海軍陸戦隊の厳戒下、軍靴の音を背景として、ゆすりの偽憲兵が一家の前に現われる。白系ロシア人がフランスパンを売り、その隣りはソーセージを売るドイツ人の店で、マーケットには世界各国の食物があった。ここでドイツ人と書かれているのは、あるいはドイツ系ユダヤ人なのかもしれない。作者一家は大戦末期に長崎へ最終的に引揚げ、そこで原爆に遭う。林京子の芥川賞作品『祭りの場』（昭和50、1975年）はこの被爆体験を問いつめたものである。作者一家が住むこの「路地」こそは、治安の奥に隠された時代のリアリティの潜む逃亡者たちの地下活動の場でもあり、上海時代の魯迅が生活し、行動し、作品を構想した場でもあったろう。

さかのぼって、魯迅が許広平と共に広州を脱出して、上海の北四川路東横浜路景雲里に到着し、はじめて二人の家庭生活が始まったのは1927（昭

和2)年10月、魯迅46歳の時だった。この家を彼が半分租界という意味で文字を分解して「且介亭」と名づけたというのも面白い<sup>13</sup>。内山書店と住居のほど近かった魯迅はまもなく内山と昵懇になり、蒐集した世界の木版画(ケーテ・コルヴィッツなど)を内山の協力で展示会まで催し、中国美術界に大きな転機をもたらしたこともよく知られている。ここで特記しておきたいのは、魯迅の心中には深く「さまよえるユダヤ人」Ahasver 伝説のことが秘められていた問題である。これは1923年末魯迅が北京の女高師で行なった講演「ノラは家出したのちどうなったか」<sup>14</sup>の中でとりあげられ、永却の罰を受けた Ahasver は休みなく歩き続けねばならないが、「おそらく歩みの方が安息よりまだ心地好い。ですから絶え間なく狂ったように歩み続けているのであります。しかしこの犠牲が心地好いというのは自分自身のことであって、志士たちのいわゆる社会のためということとは無関係です」と語っている。「人生で最も苦しいことは、夢から醒めたのに歩むべき道が無いことです。しかしノラは目覚めた以上、夢の国に戻ることは難かしく、だから歩まざるをえません。」魯迅はまたシェンキェビチ(ポーランド)の名作『クオ・ヴァディス』(何処へ行く)を愛読し、1925年に書いた詩劇『旅人』に登場する旅人の老人も明らかに Ahasver を思わせる。魯迅がイエスの生涯を含めてユダヤ人の運命に強い共感をもっていたことは、当時の中国近代化の混沌の中に敢えて前方を凝視し続けようとする、非共産党員魯迅の姿を浮びあがらせずにはおかない。

有名な「絶望の虚妄なることは、まさに希望に相同じい」(詩「希望」の最終行、散文詩集『野草』所収)という詩句には、この裏付けがあるであろう。増田渉(元関大教授、故人)は昭和6(1931)年から翌年にかけてほぼ10カ月、上海で毎日魯迅宅を訪ね、教えを受けた、まるでゲーテにおけるエッカーマンのような人で、帰国後魯迅伝を書き、岩波文庫から最初の『魯迅選集』を出した。昭和7(1932)年1月に上海事変が起き、魯迅は家族共内山書店に避難し、のち英租界の宿に一時移っている。当時最

も親密だった瞿秋白はやがて度々魯迅宅に緊急避難するようになり、そこで2人の合作のような著作が幾つも成立するが、同じ頃つねに構想を語り合っていた茅盾の長篇『子夜』が完成された。竹内好によれば、この作品（1933年初版）は、趙樹理の『李家荘の変遷』と並んで、中国を知るために最良の必読文献だという<sup>15</sup>。昭和10（1935）年には内山完造が50歳で初めての随想集を東京から出版し、これに魯迅が序文を贈り、『生ける支那の姿』と題された。翌年、2・26事件とベルリン・オリンピックの年の秋に、魯迅は上海で死去、全中国を揺がせた<sup>16</sup>。翌12（1937）年が日中戦争突入の年である。

上記の竹内好によれば、1930年代の中国は国民党による全国統一がまがりなりに完成し、初めて近代国家が形成されて、それが日本の軍事干渉によって挫折する時期であり、日本の中国認識に最も欠けている最大の弱点部分とされる。30年代がわからなければ、現代中国について何一つわかるわけがないという。茅盾の『子夜』は1930年初夏の上海を舞台とし、民族資本の運命を描いた作品であり、芸術家の良心の極限まで行きついている。竹内は「1970年の東京は1930年の上海にそっくりだ。われわれは1930年の上海に向かって逆歩しているのではないだろうか」と言っている。当時の上海は日本よりはるかに先進的で、大学は男女共学、自由討論のムードが支配し、労働者と経営者の関係においても警官はまったく中立であった。この時代の上海の映画演劇、ジャズ、マンガ、流行歌等々の鮮烈な綜括は海野弘『上海摩登』一卷<sup>17</sup>におさめられている。このような上海の残滓を留める大戦末期の上海で、作家石上玄一郎はそこに生きるユダヤ人たちの姿に触発されて、後年『彷徨えるユダヤ人』（1974年人文書院）を著すことになる。武田泰淳には大戦末期の上海を舞台にして『上海の螢』『月光都市』<sup>18</sup>などの小説があり、前者の最後には米軍の上海上陸の噂を耳にしながら、「米英両国は永い時間をかけ、多額の資本を投じ、フランス人と協力して、租界を美しい街に造り変えようとした。上海の真価を知っているのは彼らで

あり、日本人じゃない。なるほど上海市民の感情を無視して、彼らは中国人をはっきり差別した。だが、日本人は差別どころか何事も成しえなかった」「日本はやらずぶったくりだ。くれたのは日本精神だけ、米英人はグブアンドテイクだ」「上海人はね、破滅が嫌いだ。玉砕や夭折を何より好まない、持続が好きなんだ」……という対話が連なる。同じく『目まいのする散歩』の最後は次の言葉で結ばれている。「地球上には、安全を保証された散歩など、どこにもない。ただ、安全そうな場所へ、安全らしき場所からふらふらと足を運ぶにすぎない」。

### 3. 一ドイツ系ユダヤ人の大戦下上海生活の回想(上)

ここに概略を紹介するフリッツ・カウフマン (Fritz Kaufmann) の回想は<sup>19</sup>、1963年2月、ニューヨークの「上海昼食クラブ」(Shanghai Tiffin Club)で行なわれた講演をカウフマン自ら加筆しドイツ語訳したもので、これを核として随所で筆者による解説ないし問題展開と資料提供を行なっていきたい。

カウフマンは1904年、シュトゥットガルト・カンシュタットに生れ、1931—49年の間を上海に居住、1954年以降 USA に住んでいる。彼が上海に来たのは、一般のドイツ系ユダヤ人とは異って、1927年に23歳で既にドイツを離れてから、まずドイツ各種商社の公式代理人としてオーストラリアに渡り、そこが不況のため商売不振となった1931年に、幾つかのオーストラリア輸出業者の仕事のため中国へおもむき、上海によい仕事の場を見出して、同地に留まる決心をした。彼はあるドイツ最大の輸出入商社の一つに入社して、数年後にはかなりの指導的地位を得、やがて1939年にはその社を辞めて独立した。イギリスの友人たちが彼のためにイギリス諸官庁への保証金を供託してくれたからで、そのお陰で「敵国貿易」を禁じたイギリスの法律にも公式に除外例とされて、当時まだ有効だったドイツのパスポートを所

持する唯一のドイツ人として特例的に仕事をすることができたのである。

カウフマンのドイツ国籍がドイツの国法によって剥奪されたのは、ようやく1941年夏のことで、これはドイツの国外に住む全ドイツ系ユダヤ人に共通していた。既にヒトラーは1939年1月に欧州の「ユダヤ人種絶滅」を国会で宣言し、同年9月第二次世界大戦が始まり、独ソ両軍がポーランドに侵入し、アウシュヴィッツなど各地に強制収容所が翌40年に設置された。続く41年にはいわゆるユダヤ人問題の「最終解決」(Endlösung)が指令されて、アウシュヴィッツの「ガス室」が始動し、徹底したユダヤ人根絶政策が翌年にわたって強行されるのである。一方の中国情勢をみれば、アヘン戦争以来、帝国主義下列強の半植民地と化した中国の知識人・学生・全国民層の苦悩は深く、1911年の辛亥革命から第一次大戦をへて、山東半島をめぐるドイツ権益の日本軍奪取と抗・排日運動の激化の下に、1919年の「5・4運動」、「上海三罷斗争」が生れ、横光の『上海』時代が1925年「5・30運動」の時期とすれば、カウフマンが上海に渡った31年に「満州事変」が起り、翌32年には第一次「上海事変」、次いで「満州国」の成立という激動期にあたり、33年1月のヒトラー政権成立によるドイツでの一斉の反ユダヤ迫害政策の立法顕在化と併せて、既述のような上海へのユダヤ人集結は急速に現実化していった。37年に第二次「上海事変」、日本軍の「南京大虐殺」、40年には汪精衛の南京「国民政府」樹立があって、翌41年12月太平洋戦争が開始されたのだから、カウフマンの上海での歩みはそれら前後左右のめまぐるしく錯雑した世界情勢を背景としつつ、遂に41年には無国籍者となったのだ。しかし、意外なことに、戦争勃発後の上海では、無国籍であることはむしろ好都合、有利な結果を生んで、カウフマンは西欧の同盟諸国の敵でもなければ、反ユダヤ迫害勢力の側にも立たない中立の立場となり、また永年仕事上の取引相手であった日本人は、当初はドイツのユダヤ人問題をまったく理解せず、カウフマンにたいする態度も偏見のないまともなものであった。さまざまな困難は、1942年

にいたってようやく始まったのである。

カウフマンの回顧を重複をいとわず紹介すれば、彼が上海にやってきた当時の在上海ユダヤ人の状況はおよそ三つの異ったグループに分かれていて、相互の接触はほとんどなかった。第1は中近東方面からきたセファルディム系のユダヤ人、第2、第3はアシュケナジム系で、第2はロシア・ポーランド等の東欧からきたユダヤ人であり、第3は中欧の主としてドイツ・オーストリア・チェコスロヴァキア出身の人々であった。セファルディムの人々は前世紀の中頃から既にイラク・インド・カイロから来て、その中の幾つかの家系は時とともに巨富を築いて裕福になり、サッスーン、ハードリー、ハードーン、エズラ、シャーモーン、バルーフのような富豪一家は世界にも知られ、社会的には上海のなかに融けこみ、隔てのない国際雑居の生活を営んでいた。

第二の波はロシアのユダヤ人で、十月革命の後に満州へ逃れ、ハルビンや大連のような都市に定着し、1925年と40年のあいだ、特に1933年の日本軍占領後、さらに南へ逃れて上海に達した。1941年12月の太平洋戦争開戦時には、上海におよそ1万のこの系統の人々が住んでいた。彼らの多くは小規模の店を開き、その経済事情は好転しはじめていた。そこへ最後の到来者として、中東欧からのユダヤ人である。カウフマンが上海に来た1931年当時には、中欧系のユダヤ人はまだほんの10家族程度にすぎず、大半は独立ないし外国およびドイツの大企業に属して輸入業に従事していたのだが、33年以降4年ほどの間のヒトラー・ドイツからの最初の亡命者は、主として学者・医師・弁護士・技術者といった専門知識人で、全体で300人ほどであった。この時期にはまだドイツから金も携行できたから、特に苦労もなく到着でき、先住のドイツ系ユダヤ人は小さな救援委員会を組織して、カウフマンの記憶するかぎり、この組織から財政的援助を受けたのは僅か2家族にすぎなかった。例えば同じ頃日本を訪れた建築家ブルーノ・タウト (Bruno Taut, 1880—1938年) は、やはりナチスからの亡命者であ

ったが、ユダヤ人ではなく、36年秋まで滞日して、トルコのイスタンブールへ国賓待遇で招かれ、その地で客死した。桂離宮その他の純古清楚な日本美を讃歎したタウトも、「建築家の休暇」として著述を事とするほか日本から報いられるところは少なく、彼の死後そのデスマスクを持って来日したエリカ夫人も、戦時下の日本から上海に移り住み、大戦終結まで上海に留まっている。

太平洋戦争勃発までの上海は、移住制限のまったくない世界唯一の都市だった。したがって、1938年11月の全ドイツに荒れ狂ったポグロム、いわゆる「水晶の夜」(Kristallnacht) 以後の逮捕追求の波で、上海への逃亡者も急増した。欧州での大戦勃発までの亡命は大部分海路船によるものだったが、その後の多くはシベリア鉄道経由でウラジオストックまで来、それから船で神戸へ、最後に上海へ辿りつくコースだった。この道は独ソ開戦、ナチス軍隊のソ連戦線展開によって閉鎖されたが、当時既にドイツ・オーストリア・チェッコ・ハンガリーからの上海亡命者は2万5千を越えていたという。亡命客をのせた最初の船が上海に着きはじめてとき、カウフマンたちは直ちにこれまでよりも大きな救援組織をつくり、ここで初めてセファルディム系とアシュケナジム系のユダヤ人が手を携えて協力した。全員がすべての行きがかりをすてて断固たる行動力で惜しみなくこれに加わったが、それにしても亡命の波は次々とおしよせて、比較的裕福なユダヤ人でさえ手に負いきれない状態で、さいわいアメリカのユダヤ人たちが援助の手をさしのべてくれ、“Joint Distribution Committee”を通じて、着のみ着のまままで窮迫した亡命者たちの給養・宿舎等に十分な資金の提供があった。彼らはそこで上海の国際居住区「セツルメント」の部分であった<sup>キンキュー</sup>虹口地区の大きな地域を占めることになった。ここは37年の上海事変でひどい損傷を受けた地区であり、まさに林京子『老太婆の路地』の舞台と時も所も同じくしている。家屋の多くは雨露をしのぐために修復され、他の建造物も一種のラーゲルで男女の寝室を別々に切離した集団宿舎

に改造された。各人が少なくとも日に1回の温かい食事を得られるように、台所も用意された。大部分の人々にとって、それは惨めな生活だったが、それでもナチの強制収容所（KZ）のことを思えば、まだましとすべきものだった。例えば上海には既に三つのシナゴークがあり、1904—39年の間に英・独・露語中心のユダヤ雑誌が12種も刊行され、なかでもシオニズムの月刊誌“*Israel's Messenger*”が指導的であった。

ところで、ナチス治下のドイツからのユダヤ人亡命状況の概要を一瞥すれば、当時のドイツ国内のユダヤ人亡命救援組織には、パレスチナ移住のためのパレスチナ局（Amt）、他のすべての諸国への亡命のためのドイツ・ユダヤ救援同盟（Hilfsverein）、在ドイツ外国ユダヤ人の送還ないし再移住のための救済主務部（Hauptstelle）の三つがあり、この3者が協力して、さらに諸外国に通信員400人を配置し、世界中のユダヤ関係救援機関にも連繫して、1939年までにはほぼ10万4千人の移住者をこの組織経由で送り出した。その間には無数の成功失敗、期待と幻滅のドラマが織りこまれ、振幅起伏の波動にも変化が著しく、時と共に亡命そのものの質的变化も生じている。1933年1月30日現在でドイツに定住していたユダヤ人口はおよそ52万5千人であったが、それ以降1943年までのドイツ・ユダヤ人亡命者の総数は約27万から30万と推定されている。その大ざっぱな統計表を次に示すと<sup>20</sup>、

1933年	37,000人	1938年	40,000人
1934年	23,000人	1939年	78,000人
1935年	21,000人	1940年	15,000人
1936年	25,000人	1941年	8,000人
1937年	23,000人	1942/45年	8,500人

統計（概数）278,500人

当初の亡命者は、ナチスから政治的に危険視された左翼系人士、かねて移住の企図をもっていたシオニストたち（パレスチナへ）、職を失った大学人、外国系のユダヤ人で急抛帰国した1万2千余人々等だったが、その

主たる受入れ国は北米合衆国、パレスチナ、大英帝国で、1936年末までにパレスチナへ移住したドイツ・ユダヤ人は約5万5千人であった。この入植には最低1千ポンドの資金携行を要したため、シオニストでない有産者が多かったといわれる。北米に大戦終結までに入国した部分は約13万2千で、その他キューバやメキシコにも及び、知識人、科学者、芸術家の多い特徴をもつ。英国は1938年9月までは1万1千程度だったが、「水晶の夜」以降は4万に達し、南米にも1万以上、南アフリカにも5千が逃れ、古典的なユダヤ移民国であったオーストラリアとカナダには僅か2千程度しか入国していない。それに比べて、上海への集中度の高いことは注目すべきであろう。1941年までに上海に辿りついたドイツ系ユダヤ人は約8千人であり、既に日本軍の占領下にあつて、仕事の可能性もほとんど期待できない上海に、これだけの数員が集まったことには、いかにヴィザの必要がない都市だったとはいえ、窮地に追いつめられたユダヤ人の絶望の深さと同時に、この国際都市、サッスーン家以来の歴史を秘めたこの町の懐ろの深さ、底の深さをも示して余りあるものがある。

曾て村松梢風はこの町を「魔都」とよんだ。彼が初めて上海に行ったのは、1923（大正12）年の春から夏にかけてのことで、翌年出版した同名の書の自序には「そこは世界各国の人種が混然と雑居し、あらゆる国々の人情、風俗、習慣が、何の統一もなく現われていた。巨大なコスモポリタンクラブ、そこには文明の光が燦然と輝きながら、同時にあらゆる秘密や罪悪が悪魔の巣のように渦巻いていた。極端な自由、眩惑的な華美な生活、胸苦しい淫蕩の空気、地獄のような凄惨などん底生活——それらの極端な現象が露骨に、或いは隠然とみなぎっていた。天国、と同時に地獄の都。私は雀躍りしてその中へとびこんで行った。——」と書かれているという。梢風の孫にあたら村松友視の『上海ララバイ（子守唄）』の一節であるが<sup>21</sup>、フリッツ・カウフマンはいま陸続と到着する難民の同朋たちを迎えて、次の課題に取組まねばならなかった。何とか彼らのもてる知識を生

かして仕事を見つけてやらねばならないのである。彼らは英語も話せないし、極東のリング・フランカ<sup>22</sup>も喋れない。そこでまず第一に、話し言葉を教える学校を開設することになり、富豪のハドリー家の当主からこのプロジェクトのために大枚の寄附を得ることができた。難民たちの社会復帰の第一歩には、当然なにがしかの基金が必要だった。何かの商売をする、その基礎知識を得る、そのための資金を貸与するプールがなければならぬ。これには、ヴィクター・サッスン卿がシナ弗で100万以上の基金をポイと投げだしてくれた。

この基金運用のための特別委員会がつくられ、カウフマンはその委員長となった。無駄と浪費を避けるために、すべての依頼に慎重な対応が求められたが、さいわい亡命者たちの高率の人々が予想外の成功をおさめて、確実に返済してくれたので、次々と回転よく資金を活用することができた。言葉の障害、中国人の対外人不信にもかかわらず、1941年12月の太平洋戦争勃発時に、亡命者の半数以上の者が自身の店をもち、或いは多くの外国商社に職を得て、働いていた。多くは既に虹口の難民地区を離れ、国際「セツルメント」(共同租界)やフランス租界に住居や店を買い、ごくノーマルな上海のビジネス生活の一部となっていた。開戦となった第一日に、日本軍は共同・フランス全租界地区を無血占領し、虹口は1937年の日中戦争以来占拠していた日本海軍陸戦隊が管轄を続けた。新占領の部分は日本陸軍の管轄である。虹口地区には依然として多くのユダヤ人難民が住んでいたため、海軍はこのユダヤ人を組織し監視するために“Jewish Affairs Bureau”を開設し、その機関の初代の長は犬塚惟重大佐であった<sup>23</sup>。犬塚はユダヤ人たちのために多くのシンパシーを示してくれ、カウフマンたちは彼と共にたいへん気持ちよく仕事をすることができた。1942年、日本軍の勝利が続いていた頃、犬塚はカウフマンとの親しい雑談のあいだに、カウフマンを驚かすような話をした。それは、日本政府はユダヤ人に友好的だ、日本は1年のうちに勝利をおさめるだろうが、その暁にはユダヤ人

にパレスチナを“national home”として提供するだろう、第一次大戦中に英国がバルフォア宣言で約束したことを、今度は日本が実行するだろう、という話だったのである。この時の日本将校の小グループは主に海軍で、彼らはこうした約束を通して USA との平和条約のためにユダヤ人のシンパシーを動員することができる、と信じているようであった。この軍人たちは、1904年の日露戦争に際してアメリカのユダヤ人金融家ヤコブ・シッフ (Jacob H. Schiff, ドイツ系) が大量の戦時外債を高橋是清から買いつけて、救いの手をさしのべてくれたことを忘れていなかったのである<sup>24</sup>。

しかし、残念なことに、犬塚はこの機関にながく留まることができなかった。1942年の春、数人のドイツ・ゲシュタポ将校が潜水艦で上海に上陸し、その中には悪名高いマイジンガー大佐がいて、これを契機に犬塚は配置換えとなり、機関は新たに再編されて、海軍、陸軍、憲兵隊、領事、大東亜省の出先機関が合同して機関を運営し、これらはみな忽ちゲシュタポの勢力下におちいったように見えた。やがて日本の官憲の態度は明らかに変化をみせはじめ、難民たちの経済活動はきびしく統制され、中国の新聞にはきまって反ユダヤ的な論説が現われはじめたのである<sup>25</sup>。 (続く)

## 注

- 1 『武田泰淳全集』別巻1より、「現代について」1979年、筑摩書房。
- 2 『第七の十字架』(初版時、筑摩書房1952年)は山下、新村の共訳、『死者はいつまでも若い』(白水社1953年)は他三氏と山下の共訳で、両書とも武田、堀田両氏に山下から献呈している。
- 3 佐藤晃一、山下肇『ドイツ抵抗文学』1954年、東京大学出版会、「序文」より。
- 4 『さすらいの航海 Voyage of the Damned』パンフレット、1977年、ヘラルド映画。
- 5 朝日新聞1976年12月14日号「ニュースの顔」より。
- 6 日本中国文化交流協会編集『日中文化交流』No. 413、1986年12月1日号。
- 7 宇野正美『ユダヤが解ると世界が見えてくる』1986年、徳間書店参照。ただし、この種の書物は、ベンダサン『日本人とユダヤ人』以来、日本の経済大国化と国際化の流れのなかで、きわめて危険な役割を果たそうとするものであり、例え

ば山蔭基央『ユダヤの世界支配戦略』1985年、マネジメント社の書名にも見られる極右的傾向と同巧異曲で、一部の事実を伝えてはいるものの、曾ての「シオンの議定書」捏造のごとき反ユダヤ主義デマ宣伝が共産主義とユダヤ人を結びつけて反共弾圧に拍車をかけたのと形を変えた「マネーゲーム」流反ユダヤ・イデオロギーの怖るべき便乗的アジテーションと断ぜざるをえない。近來とみにこの種の書が頻発しはじめた傾向は、日本の国内世論の右傾化操縦の一動向として警戒する必要がある、学問的ユダヤ研究と厳に一線を画さねばならない。この点は既に米国上・下院議員の有志や駐日イスラエル大使館からも中曽根首相あてに厳重な抗議と警告が発せられている（「朝日」87年3月14日夕刊報道）

- 8 *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 26. Feb. '86. "Eine Synagoge in Kai-feng. Die Geschichte der Juden in China ist noch wenig erforscht." D. Schauwecker 氏の好意ある提供による。
- 9 上掲杉田六一『東アジアへ来たユダヤ人』42ページ以下参照。
- 10 松本重治『上海時代』中公新書1974年(上)巻の後記の「上海略史」(加藤祐三), 同じく加藤祐三「上海」(読売新聞社編『都市物語』所収, 1982年), NHK「ドキュメント昭和」取材班編『上海共同租界』1986年, 角川書店等を参照。
- 11 内山完造『花甲録』1960年, 岩波書店。内山の「第一歩」当時の上海の日本人口は約3千人, 日米独露の領事館が並び, ドイツ人のキリスト教会, ドイツ人クラブもあったという。内山の努力で大成功を博した日本の学者たちの上海講演会では, 吉野作造, 賀川豊彦, 内ヶ崎作三郎等と並んでドイツ文学の成瀬無極の名があり, 内山の隣人はドクトル・ゲーテとよばれたほどゲーテに造詣深い石井政吉医師であった。内山書店は昭和初年のいわゆる「円本時代」に最盛期を迎え, その頃魯迅との親交も深まり, 郭沫若をしばらく隠まったこともある。
- 12 林京子『ミッシェルの口紅』1983年, 中公文庫所収。
- 13 雑誌「ユリイカ」魯迅特集号, 1976年4月, 青土社参照。特に増田渉, 竹内好, 橋川文三(対談), 伊藤虎丸, 安藤彦太郎, 松井博光等の文章。
- 14 Ahasver は, イエスがゴルゴタの丘で磔刑となる前, 途中の坂道で水を求めたとき, それを拒否したとされるユダヤの靴匠の名で, この罪により永却の罰を受け彷徨の旅を続けるユダヤ人の代名詞的呼称になった。ゲーテ以来この題名の詩文作品はきわめて多く, 芥川龍之介の『さまよへるユダヤ人』1917年もこのひそみになったもので, 魯迅もこれを読んでみよう。藤井省三「魯迅と『さまよえるユダヤ人』伝説」上下, 平凡社「月刊百科」, 1986年11, 12月号も参照。
- 15 竹内好『中国を知るために』第3集, 1973年, 勁草書房所収(78)「上海1930年」。
- 16 上掲, 内山完造『花甲録』に詳しい。
- 17 海野弘, 中村愿『上海摩登』モダン都市上海1920-30, 光と闇』1985年, 冬樹社。
- 18 上掲『武田泰淳全集』所収, 『月光都市』は第1巻, 『上海の蜩』『目まいのする散歩』は第18巻。

- 19 Fritz Kaufmann: *Die Juden in Shanghai im 2. Weltkrieg. Erinnerungen eines Vorstandsmitglieds der Jüdischen Gemeinnde.* in: "Bulletin des Leo Baeck Instituts (Jerusalem). 73/1986, Jüdischer Verlag bei Athenäum.
- 20 *Jüdisches Leben in Deutschland, 3. Bd. Selbstzeugnisse zur Sozialgeschichte 1918–1945.* Hrg. v. Monika Richarz. Veröffentlichungen des Leo Baeck Instituts. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1982. S. 53ff.
- 21 村松友視『上海ララバイ』1984年, 文芸春秋刊。村松梢風『魔都』は1924年7月, 小西書店刊で, 後に同じ梢風の著『上海』も書かれたという。
- 22 リンガ・フランカ lingua franca は, イタリア語, フランス語, ギリシア語, スペイン語の混成で, 地中海沿岸シリア, レバノン, パレスチナ地方で用いられ, さらに商人用語として広く用いられるようになった一種の国際語である。
- 23 犬塚きよ子『ユダヤ問題と日本の工作. 海軍・犬塚機関の記録』1982年, 日本工業新聞社 はこの間の消息を伝える重要な記録であり, 詳細は次の続稿に譲りたい。
- 24 日露戦争におけるドイツ・ユダヤ銀行家たちの対日資金援助については, Jacob H. Schiff のみならず, Sir Ernest Cassel と Max Warburg (高名な Archiv の美術史学者 Abi Warburg の父) も名を連ねており, 例えば次の論稿 A. J. Sherman: *German-Jewish Bankers in World Politics. The Financing of the Russo-Japanese War.* Leo Baeck Institute, Year Book XXVIII, 1983 に詳しい。尚NHKの歴史ドキュメント「日露戦争の裏面」放映(86年末)もこの問題を紹介した。
- 25 カウフマンの回想はまだ前半部を紹介したにすぎず, さらに重要文献として, David Kranzler: *Japanese, Nazis & Jews. The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938–1945.* Yeshiva University Press, New York, 1976 を参照しつつ, 次稿で一層広い展望を拓きたい。

[その他の参考文献]

- 1 Walter A. Berendsohn: *Die Humanistische Front. Einführung in die deutsche Emigranten-Literatur. 1. Teil,* Europa Verlag Zürich, 1946.
- 2 F. C. Weiskopf: *Unter Fremden Himmeln. Ein Abriß der deutschen Literatur im Exil 1933–1947.* Dietz Verlag Berlin, 1948.
- 3 Matthias Wegner: *Exil und Literatur. Deutsche Schriftsteller im Ausland 1933–1945.* Athenäum Verlag Frankfurt a. M. 1967.
- 4 *Die jüdische Emigration aus Deutschland 1933–1941. Die Geschichte einer Austreibung.* Eine Ausstellung der Deutschen Bibliothek Frankfurt a. M. unter Mitwirkung des Leo Baeck Instituts, New York. Sonderveröffentlichungen der Deutschen Bibliothek; Nr. 15, 1985.
- 5 松本重治『上海時代』上中下, 1974–5年, 中公新書。

- 6 丸山昇『ある中国特派員—山上正義と魯迅』1976年，中公新書。
- 7 『高木八尺著作集』第3巻「アメリカ外交」1971年，東京大学出版会。
- 8 久野収『ファシズムの中の1930年代』1986年，リプロポート。
- 9 小島晋治，丸山松幸『中国近現代史』1986年，岩波新書。
- 10 中嶋嶺雄編『中国現代史』1981年，有斐閣選書。
- 11 柳田邦男『マリオ』1980年，新潮文庫。
- 12 伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇編『近代文学における中国と日本—共同研究・日中文学関係史—』，1986年，汲古書院。
- 13 伊藤虎丸『魯迅と日本人』1983年，朝日新聞社。
- 14 安江仙弘『ユダヤの人々』1937年，軍人会館出版部。
- 15 小山猛夫『東亜とユダヤ問題』（満鉄弘報課編）1941年，中央公論社。
- 16 Hermann Kesten : *Deutsche Literatur im Exil. Briefe europäischer Autoren 1933-1949*. Verlag Kurt Desch 1964.
- 17 Kurt Jakob Ball-Kaduri : *Das Leben der Juden in Deutschland im Jahre 1933. Ein Zeitbericht*. Europäische Verlagsanstalt 1963.
- 18 Kurt Jakob Ball-Kaduri : *Vor der Katastrophe, Juden in Deutschland 1934-1939*. Olamenu, Tel-Aviv 1967.
- 19 Das Exilerlebnis. Hrg. v. Donald G. Davian u. Ludwig M. Fischer. *Camden House*. Columbia, South Carolina 1982.
- 20 Exilforschung. *Ein internationales Jahrbuch. Bd. 1, 2*. Hrg. im Auftrag der Gesellschaft für Exilforschung, edition text+kritik, München 1983, 1984.

# Deutsche Juden in Schanghai ( I )

Eine Einleitung

Hajime Yamashita

Bei diesem Thema handelt es sich zuerst um unsere „Gleichzeitigkeit“, deren Brennpunkt die internationale, chinesische Stadt Schanghai in der chaotischen Zeitgeschichte ist, wie die japanischen Schriftsteller T. Takeda und Y. Hotta miteinander sprechen. Diese haben beide die letzte Katastrophe des zweiten Weltkrieges in Schanghai erlebt. Die von Japan besetzte Hafenstadt Schanghai war damals bis zum Ausbruch des Krieges im Pazifik (Ende 1941) der einzige Ort auf der Welt ohne Einwanderungsbeschränkungen, der als einziges Territorium nie ein Visum verlangte. Also war diese Stadt als ein komplizierter und undurchsichtiger Sammelpunkt wie ein Haufen angewelter dürrer Blätter aus der Welt die typischste, auf die sich die vieldeutigen Emigranten und Kosmopoliten aller Art konzentrierten. Mitten darin schuf Lu Xun (1881—1936) zusammen mit den fortschrittlichen Literatur-schaffenden in harten Auseinandersetzungen die bedeutendsten Grundlagen für die moderne chinesische Literatur.

Die älteste Judensiedlung in China fängt schon im 9. Jahrhundert über die Seidenstraße an. Ihr erster Mittelpunkt war die Handelsstadt Kaifen am Gelben Fluß (Provinz Heenan), wo die jüdische Gemeinde eine Synagoge 1163 erbaute, die älteste bislang bekannte in China. Als China in der Mitte des 19. Jahrhunderts unter dem Druck der Großmächte sich dem westlichen Handel erneut zu öffnen begann, erfolgte eine größere Einwanderung von Juden. Vor allem sephardische Juden gründeten ein wichtiges Zentrum in der Hafenstadt Schanghai, die später zum Zufluchtsort für viele verfolgte Juden aus Deutschland, Österreich und Polen

werden sollte.

Damals konnte jeder hier landen oder bleiben, mit oder ohne Paß, und so brachte die auf das Novemberpogrom 1938, die sogenannte „Kristallnacht,“ folgende Verhaftungswelle eine Flut von Flüchtlingen nach Schanghai. Wie verzweifelt die Suche nach Zufluchtsländern war, zeigt die starke Auswanderung in die Stadt. Etwa 8000 deutsche Juden reisten bis 1941 in Schanghai ein.

In der sehr komplexen Geschichte in China, die einen Zeitraum von mehr als tausend Jahren umfaßt, entwickelten sich die großen Handelshäuser des vergangenen Jahrhunderts besonders in Schanghai, zu denen so bekannte Namen wie Sassoon, Kadoorie usw. gehören. Zusammen mit diesen Nachfahren der Händler des 19. Jahrhunderts hatten die jüdischen Flüchtlinge China bis zur Gründung der Volksrepublik nahezu sämtlich verlassen und vor allem in Hongkong und den Vereinigten Staaten neue Zufluchten gefunden.

Der Zeitraum zwischen dem Roman „Schanghai“ von Riichi Yokomitsu 1931 und dem gleichnamigen von Kyoko Hayashi 1983 bildet zugleich mit den Verhältnissen und Konflikten zwischen den Japanern, Nazis und den Juden den Hauptgegenstand dieser Abhandlung. In kurzem handelt es sich um die jüdische Emigranten-Gemeinde in Schanghai 1938-1945, für die es kaum Arbeitsmöglichkeiten gab. Über die damaligen Zustände, Erlebnisse und Geschehnisse hinter den Kulissen erzählen heute die „Erinnerungen eines Vorstandsmitglieds der Gemeinde,“ des selbständigen Firmeninhabers Fritz Kaufmann (1904-). Er schreibt: „Wir übernahmen einen großen Teil des Stadtteils Hongkew, der, obwohl Teil des „International Settlement“ in Schanghai, im chinesisch-japanischen Krieg 1937 schwer beschädigt worden war. Die Japaner, mit denen ich jahrelang geschäftliche Verbindungen gehabt hatte, verstanden zuerst das deutsche Judenproblem überhaupt nicht und behandelten mich recht anständig. Die Schwierigkeiten begannen erst 1942...“ (Fortsetzung folgt)